

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

黒田 禎一郎

2019年8月4日（日）

主 題：「あなたは、いったい何者ですか」

—自分が見えない私—

聖 書：ヤコブの手紙4章11～12節

はじめに

- これまで、私たちが学んできましたように、ヤコブの手紙の中心的メッセージは、「へりくだりなさい」であります。この4章は、そのテーマを最も取り上げていると思います。
- 皆さんは、「へりくだる」（謙遜）をどのように考えられるでしょうか？
私たち大人は、しばしば謙遜になるために努力をするものです。けれども小さい子（1歳、2歳ぐらい）は、努力なしに謙遜ではないでしょうか。
- 小さい子どもは、まだ人見知りもしない頃（もっとも可愛い）は、自分が目立つ場所に置かれても、あるいは誰の目にも止まらないような、床の上で這い回っていても、自分を意識しません。しかし、いつそうなるか分かりませんが、やがて自分を意識するようになります。その瞬間から、あの人見知りもしない幼子としての魅力を失ってしまうのです。幼子にとっては、本物の王冠も、ピカピカした安物の飾りも少しも変わらないのです。
- 皆さん。聖書のいう謙遜とは、自分がある状態に引き下げることではなく、自分をまったく考えないことを指します。そのような謙遜は、大人は誰も持ち合わせておりません。謙遜になることは、それほど難しいことです。人間の本性は、謙遜とはまったく逆で、常に自分を評価すること、自慢することです。しかし幼子は違います。イエスは次のように言われました。**ルカの福音書**
18:17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」
10:21 イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。
- では、謙遜になることが難しい大人には、どんな問題があるのでしょうか。
ヤコブは問題として、言葉を取り上げてきました。口から発する言葉が、問題となるのです。今日の聖書箇所では、「悪口」を言うてしまうことです。そこでヤコブは、神を信じる聖徒はどのように生きるべきかを説いています。2点

大切なポイント**1. さばいてはいけません**

1) 悪口の問題

- 4:11 兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。

ヤコブがこのように述べた背後には、当時信者の中に他の信者の悪口を言う者が、かなりの人数がいたからでした。しかも、それが日常化していたのです。

- 教会が大きくなりすぎると、マグダラのマリアのように心から悔い改めてクリスチャンになるのではなく、皆がなるから自分もなるという人々がいたようでした。クリスチャンになることに、なんの抵抗も感じなくなっていたのではないかと思います。そのような人々の集まりでは、信仰の根本問題について語り合うというより、世間話し、うわさ話し、悪口に花が咲くものです。
- 悪口を言うことは、自分の立場を引き上げるために、相手のことを悪く言ったり、糾弾したりすることです。ヤコブは悪口を言っていけない理由の一つに、「**律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。**」と言いました。兄弟の悪口を言う者は、律法の悪口を言っているのです。ここで言う「律法」とは、モーセの律法ではありません。この律法は「完全な律法」、「自由の律法」のことです。ヤコブの手紙

1:25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。

- つまり、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という律法のことです。
- 2:8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行ないはりっぱです。兄弟たちの悪口を言うとき、それは「完全な律法」(黄金律)に違反することです。自分をそれ以上の地位に置いているということです。それは、とんでもない思い上がりであります。

2) 神の権威

- もう一つ、なぜ悪口を言っていけないかという理由が12節にあります。
- 4:12 律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。
- ヤコブは天地創造の神の権威に注目するよう、呼びかけています。神は律法を通して、ご自身の意思をはっきりと示しておられます。そして律法の意図を実現させるために、人をさばいたり、救ったり、滅ぼしたりすることがおできになります。
- 皆さん。隣人の悪口を言うということは、神にしか属していない権威を自分が行使しているということです。これは、神の権威に対する重大な違反になります。ヤコブは「隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか」と尋ねています。

*大切なことは、人にはさばく権威は与えられていないことを知ることです。
神のみがその権威をお持ちであります。

- いかがでしょうか……。私たちが今、自分の姿を顧みて、傲慢になっていなかったか

どうか、自分を吟味してみようではありませんか。どうぞ、覚えてください。私たちの使命は、隣人を愛することであって、さばくことではありません。

- しかしながら、実際生活の中では、明らかに間違っただけの人はいません。又、問題を持っている人もいます。私たちはどうしても、人との話し合いの中で、取り上げなくてはならないことがあるでしょう。家庭でも、教会でも、他人の間違いに気づいたとき、注意したり、正したりすることは必要なことです。そういうことを、さばくことだと言っているわけではありません。どうぞ、誤解しないでください。

2. 忠告する者の条件

- 聖書は実際生活の中で、私たちは間違っている人に出会うことがあると教えています。そういう時、あなたはどうされますか？ どんな対応をされるのでしょうか。信頼関係がない状態で、忠告の言葉を発したため辛い経験をした方も、あるいはおられるかも知れません。
- 人に対して忠告をするには、私たちにはいくつかの条件があります。ガラテヤ人への手紙は、忠告を与える人の条件について教えています。

1) 柔和な心で

6:1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。 ガラテヤ

- 要するに、怒り狂って注意をしてもだめだということです。まず、柔和な心が自分の内側にあるかどうか、チェックする必要があります。ですから相手に対する怒りから、自分が解放されているかどうかということが大切です。もし腹を立てた状態であるならば、その人に忠告する資格はないということです。
- 「柔和」ということは、「御霊の実」(賜物)のひとつです(ガラテヤ5:22, 23)。御霊によって生きる人には、御霊の賜物が与えられます。神のあわれみによって、柔和な心も与えられるのです。ですから、自分の心に柔和な心があるかどうか、相手の人に対する愛があるかどうかをチェックすることなく、「それは間違っている」と言うことは許されないということです。

2) 互いの重荷を負い合う

6:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。 ガラテヤ

- あやまちや罪には、だいたい結果がつきまとうものです。相手の人の問題点、あやまちや罪の結果を自分が負ってあげる覚悟があるかどうかです。俗な言葉で言えば、「泥をかぶる」ということです。泥をかぶる覚悟があるならば、注意する資格があります。
- しかし、もしそれがなく、高いところからの上から目線で冷たく、相手を見るなら、むしろ注意すべきではないということです。それほど、相手に注意をするということは、責任が伴うことです。なぜなら、私たちはみな完全ではないからです。泥沼の議論の罠に、はめられてしまわないことが大切です。

3) 自分をチェックする

6:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。ガラテヤ

- ここまで述べてことにも通じますが、私たちは、いろいろな点で、「自分はどうか」と自己吟味する必要があります。自分をチェックすることをしなくて、他人に忠告する資格はないということです。
- 私たちは時として、他人のことを「あの人はあんなことをしている」と言います。しかし、自分も同じようなことをしてしまうのです。「あの人は口うるさいな」と言いますが、自分も結構口うるさいことがあります。
- 神は、そういう私に「お前は立派か？」と問われます。立派でもない自分が立派であるかのように思い、「あの人は・・・」と言うのは間違いであると言うのです。人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があります。
- あなたは人のことを、あれこれ言うけれども、自分のことをもう少しちゃんとしないさい、と言っているのです。パウロは、「あなたは自分に問題をもっているではありませんか。まず、それを解決しなさい。そして、その上で愛があるならば、他の人のことを考えてあげなさい。」と言っています。

ここでまとめてみましょう

* 私たちが人のことを心に留めたり、ある時は注意をしたりすることは必要なことです。ですから、もし人のあやまちに気づいたならば、注意することは人をさばくことではありません。しかし、ここで大切なことは、人に注意する前に、まず自分が神の光に照らされる必要があるということです。

- みことばの光に照らされることです。光の内になければ、肉の思いが浮上することでそしょう。ですから、その危険性は常にあります。日々、主様の前で心を静めることが肝要です。

まとめ

主 題：「あなたは、いったい何者ですか」

—自分が見えない私—

- ヤコブは、当時の社会で問題となっていた悪口の問題を取り上げました。そして「へりくだりなさい」と教えています。神を信じるという人たちの中で、他人の悪口を言う人たちが現れてきました。ヤコブは、それは非常に危険なことであると説いています。サタンの思うつぼにはまるからです。
- では、なぜ人さばいてはいけないのでしょうか
 - ① 完全でない人間にさばく権威はないから
 - ② さばく権威は神の領域である（バンダリースを越えてはいけない）

4:12 律法を定め、さばきを行なう方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

- ここで覚えないことは、「さばくこと」と「忠告すること」は異なることであることです。

しかし、聖書は忠告する際にも条件があることを教えています。

それがガラテヤ人への手紙 6 章 1 ～3 節です。私たちはこの 3 節で何を学んだでしょうか。⇒ 完全でもない私たち人間が先ずすべきことは、神の光に照らされる必要があることです。

6:1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、
柔らかな心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気
をつけなさい。 ガラテヤ

* God bless You !